

Income Inequalities and Lifestyles

特集 生活者の格差論

● 現代生活者と格差問題

所得格差は何故問題なのか 論議の意味と背景 猪木 武徳

対談 社会的紐帯の回復に期待される行政、NPO、企業の連携
福原 宏幸 × 清水 英範



所得格差は何故問題なのか

論議の意味と背景

猪木 武徳 *Written by Takenori Inoki*

平等は幻想か

近年、日本における所得格差の拡大が取り沙汰されることが多い。議論は、所得格差の拡大があったか否かという問題にはじまり、格差拡大の是非が、現代の産業社会にとって何故重要問題なのかという点まで広げられるようになった。

一九八〇年以降、所得の格差拡大があったかどうかという点については、統計で見える限り、日本では、一般に主張されるほどには大きくはない」という結論に収束しつつある。しかし、所得格差の「拡大があった」とこと自体は否定できない。拡大の最も大きい原因は、大竹(二〇〇五)が指摘するように、労働者の高齢化であった。もともと所得格差の大きい高齢者グループの人口に占める割合が高くなれば、おのずと格差は広がった様に見える。その後の九〇年代以降については、特に顕著な賃金格差の拡大は見られない。こうした結論は、データを丁寧に加工し計算すれば、大騒ぎするほどの(英国や米国での格差拡大ほどの)実態はないという主張に落ち着く。

しかし、次の点は見逃してはならないであろう。一つは、若年層に限定すると、学歴間の賃金格差は広がったことである。高学歴者に比して学歴の低いものの賃金が、以前より低下してきた。さらに高学歴者の中高年層の間では、格差は開き気味であることも報告されている。一般法則として、不況期には賃金格差は広がる。好況期内は労働市場が逼迫するので、技能レベルの低い労働者の賃金が上昇するから、格差は縮小する傾向がある。しかし、不況になれば低熟練労働の市場ほど需給が「緩む」結果、格差が拡大するのである。日本で近年顕著なのは、九〇年代から一〇年以上続いた不況期において、企業間規模間の賃金格差が拡大したことである。大企業と

中小企業との間の賃金格差が拡大したのである。また正規社員と非正規社員との間の賃金格差も広がっている点も注目されている。

もう一つの大きな問題は、仮にこうした所得格差の拡大が、統計的に(例えばジニ係数などを用いて)認められたとしても、その拡大がいかなる場合、いかなる意味で問題となるのかという問いである。格差拡大が社会にとって望ましくない方向への変化だとすれば、それは何故なのか。格差の縮小は「平等」の実現という見地からも、常に望ましいことなのか。金銭タームでの所得格差の拡大や縮小は、そのまま人々の不満足度や満足度の尺度となりうるのか。

「所得格差の拡大」という言葉が社会に与える影響力は実に大きい。それは(杜撰な観念連合によつて)「機会」においても、「結果」においても、「不平等な社会」というイメージを人々に与え、社会への不満を高める効果を持つ。したがって「所得格差の拡大」が、事実と離れたところで、経済学者や社会学者がつくり出した「問題」だとすれば、それが現実社会に対して持つ意味を改めて検討し反省する必要がある。

所得格差と社会構造

技術進歩と経済格差

近年の複製技術の進歩には、まことに目をみはるものがある。

実は、複製技術が高度に発達したことは、特に芸術やスポーツ、あるいは知識産業全体における所得分配の不平等化を招いたという指摘がある。例えば、十八世紀・十九世紀の音楽家

たちは、いかに抜きん出た人物であっても経済生活は厳しかった。しかし二十世紀に入ると、その実力に大きな差はないにもかかわらず、高所得を得る thriving artists と、生活の苦ししい starving artists との所得格差はきわめて大きくなった。S・ローゼンが指摘したように、複製技術の発達が、その主たる原因であることは否定できない(Rosen 一九八一)。カラヤンや小澤征爾の演奏はレコードになり、CD化され、市場で大量に販売・購入される。しかし一般にはアピルしないが実力のある優れた音楽家が、そうしたチャンスに恵まれるとは限らない。実力に著しい差がなくても、経済的格差と不平等は発生するのである。

もっとも、不平等は拡大すればするほど「一般市民」の不満が高まるというものでもない。ビル・ゲイツのように巨万の富を築き上げたビジネスの「英雄」に対して、嫉妬を感じる人は少ない。むしろ多くの人々は、ある種「あこがれ」に似た気持ちでビル・ゲイツに自己を重ねあわせ、羨ましげに彼を見つめるといのが真実に近いだろう。それは恋愛にも似た感情であつて、まさに映画やプロスポーツのスターを見つめるような快感を人々は味わつたのである。一時の「ホリエモン」についてもこのことは当てはまる。嫉妬や怨嗟の気持ちから、彼らの足をひっぱろうと考えるのは、例外的な悪意を持つ人間か、彼らのビジネス上の競争相手である。

むしろ平均的な、似た状況に置かれた者同士の間での嫉妬の方が一般に激しい。これは厳しい競争の末に勝ち取つた成功に対しては、特に真実のように思われる。平等なチャンスが与えられながら、自分と大差のない境遇にいた人たちが経済的な成功を収めるような社会では、身分制度が固定的で、身分相互の隔たりが大きかつた社会よりも、通常嫉妬心が強くなる。D・ヒュームの挙げる例はわかりやすい(Hume 一七五〇)。

一兵卒は、軍曹や伍長に対するほど、將軍に対しては嫉妬を抱かないし、名ある文人は、自己に近い作家から受けるほど

の嫉視を、平凡な三文文士からは受けたくないというのである。

それは大きな不均衡や格差は両者の関係を切断して、隔たつたものとの比較を難しくし、あるいは比較の効果を減少させるためである。しかし、同じようにチャンスが与えられているにもかかわらず、あるいは資質に大きな差異がないにもかかわらず、受け取る果実に隔たりが出れば、不満や嫉妬は大きくならざるをえない。日本でも、「隣家に蔵が建つと腹が立つ」といわれた。

いずれのケースを考えても、「機会の平等」は、再配分政策のないところでは「結果の不平等」をもたらし、強い嫉妬心を生み出しがちになる。この傾向はデモクラシーの社会において最も強い。「不平等」から生まれる嫉妬心を冷やすための社会的装置が、うまく機能してくれなければ、社会的安定は保証されない。こうした嫉妬や怨望が、社会の連帯意識や市民意識を衰弱させる可能性は大いにある。

中間層は安定的か

いずれの国においても、富裕な人々、貧しい人々がいる。そしてその間に「中間の人々」がいる。アリストテレス『政治学』第四卷第十一章は、「適度なものと中間的なものが最善である」ということが認められている」として、「この「中間」というのは各人の到達しえるそのことである、と限定句を加える。ここに「最善」というのは、普通の人の力の及ばない徳を基準にしたリ、素質や幸運の賜物たる外的条件を必要とする教育を基準としたり、理想通りの国政を基準にすることを諫め、むしろ、最大多数の人々の与りえる生活や最大多数の国々が与りえる国政を基準にして判断する」ことが重要だと考えた。つまり、「普通の人がなしえないことを基準にするな」というのである。普通の人が到達できないようなレベルを基準にすると、人々は単に偽善的になるか、その高い基準と自己を同

一視して、恐ろしく傲岸になるかのどちらかであると警告しているのである。

そしてアリストテレスはさらに次のように言う。「中間的な所有は理性に最もたやすく従うが、過度の美しさとか、過度の強さとか過度の善き生まれとか過度の富とか、あるいはそれらと反対に、過度の貧しさとか過度の弱さとか非常に賤しい地位とかを持つ者は、なかなか理性についていきにくいからである」

その証拠には、過ぎた美や力や富や身分を持つものは、傲慢な者や大犯罪者になるケースが多い。過度の貧しさ、弱さや、低い地位にあるものは、無頼の徒やちっぽけな犯罪者となるものが多い。だからこそ、過度の貧しさの中でも善く生きようとする人々を、われわれは美しいと感ずるのである。

このような理由から、中間的な人々から組織された国に最も善き政治が行われるとアリストテレスは考えたのである。これらの人々が国民のうちで最も安定しているのは、彼ら自身は貧乏人のように他人のものを望むこともないし、また他人も貧乏人が裕福な人の財産を望むように、彼らの財産を望むこともないからである。また謀反されたり謀反したりすることがないために、危険なしに日常生活を送ることができるのである。

したがって国民共同体も、中間的な人々によって構成されたものが最善であり、そして中間的な部分が多数で、政治をする人々が中間の、そして生活に十分な財産を有しているということは、この上もなき幸いなのである。あるグループは、非常に多くのものを所有しているのに、他のある人々は、何一つ所有していないところでは、極端な民主制が、生粋の寡頭制があるいは、この両方の極端なものを通じて僭主制が生じてくることをアリストテレスは看破していたのである。

ジニ係数を用いて所得格差が開いたかどうかを検証することとは、事実確認としての学問的価値は高い。しかしより重要

な問題は、「ほどほどに所有している人々」、すなわち社会の中間層が「広く、厚く」形成されているかどうかということにある。「教養とほどほどの富を持つもの」が政治に参加し、善き政治を支えていくことが必要なのである。

アダム・スミスの考察

次に、所得格差を人々がどのように受け取る(perceive)のかが、社会の安定性とどのように結びつくかを、アダム・スミスの議論を材料にしながら考察してみよう。

所得格差を、人々がどのようにperceiveするか、社会の安定性とのようなチャネルを通して結びついているのか、この点について鍵となる重要な感情は嫉妬と怨望であろう。経済学の言葉で表現すると、嫉妬と怨望が社会にとって害があるのは、「パレート改善」が起こるからだ。人が自分より良い状態の者に対して、「自分もあのようにになりたい」という気持ちを抱き、そうなるように努力し、それを実現させれば、これは「パレート改善」になる。こうした前向きな気持ちは、「あこがれ(yearning)」、あるいは「羨望(envy)」であって、社会に善悪を与えるものではない。むしろ人と社会を向上させる。ところが嫉妬と怨望は、自分より状態の良い者に対して、「その人を自分の水準に引きずり下ろしたい」という気持ちを指す。これは、厚生経済学的な意味で明らかに「パレート改善」である。

福澤諭吉は『学問のすゝめ』(第一三編)の中で、「怨望の人間に害あるを論ず」と述べ、嫉妬の念を絶って相競うの勇氣を持って、と人々を叱咤した。福澤は、怨望が社会にとって害がある例として、「御殿女中」の世界を例に挙げている。「無識無

学の婦女子」の群居する御殿では、無智無徳の一主人が万事を決定している。しかしその決定に原理・原則がないところが諸悪の根源となる。勉強して賞せられるわけではなく、怠惰によって罰せられるわけでもない。主人を諫めて叱られることもあれば、諫めなくて叱られることもある。要するに万事が主人の「気まぐれ」によって決まり、「ただ朝夕の臨機応変にて主人の寵愛を僥倖するのみ」という状態が支配する。それは、あたかも的なき空中に矢を射るようなものであると福澤は言う。たまたま仲間うちで立身出世するものがあっても、その立身の方法を学ぶことができなければ、ただ羨ましく思うだけであり、この羨ましいという気持ちが、容易に嫉みへと変貌することは明らかであろう。

このように見ていくと、これまでの論理の流れをもう一歩先に進める必要がある。所得格差という客観的な統計データは必要であるが、それだけでは「不平等」の社会的含意を十分汲み取ったことにはならない。御殿女中の例で語られる「運と実力」という要素が、他人の状況を感じし評価する場合、どのような形で人々の満足度の中に反映されていくのか。アダム・スミスの『道徳情操論』はこの問題について、いくつかの興味ある論点を示唆している。「格差をいかに人々はperceiveするのか」という点について、スミスの考察の中から三点ほど検討しておこう。

境遇の変化の速度

富や所得の不平等化が進行する中、その不平等化が「自力の活動」によってではなく、御殿や社会主義社会のように、政治力や「偶然的僥倖」によって生まれるという要素が強くなると、怨望や嫉妬が社会に鬱積する。

この例として、アダム・スミスは次のような対比を持ち出している。何かの事情で急に運命に激変が生じたために、たちま

ち生活が豊かになり、社会的にも出世した人がいるとしよう。こういう人に対しては、彼の最も親しい友人でも、心からの祝意を表するということはないだろう。立身出世は最大の功績であるとはいえ、それは一般には不愉快なものであり、通常嫉妬の感情のため、当人の感じる喜びに対して共感を覚えることはない。他方、当の幸運な人間は、その僥倖に対し配慮し、他の人々にも進んで好意を行うことによって自己の幸運を分かち合おうとするとは限らない。その場合、置き去りにされた人々は、その不機嫌、疑い深さ、自尊心によって、成り上がり者の横柄さや軽侮の眼つきに対して大きな怒りを覚えるような事態も生まれる、とスミスは述べている。運命の急変は幸福にとつてたいして役には立たないのである。

人々は、その人間が少しずつ昇進の階段を昇っていき、その地位に到達するはるか以前から彼の昇進が予想されるのであれば、彼自身にも特別大きな喜びがもたらされないので同じく、まわりの人々が彼に対して、特に強い嫉妬を感じることもない。この点に関しては、現代の産業社会における企業・官庁の人事政策においても配慮はされている。昇進人事に職場全体が納得できるよう（管理職不在の場合に代理の仕事をしてみらったり、昇進前の研修や試験を受けてもらったりする等）、昇進の可能性の高さを、徐々に知らしめるような方式が採られている。

社会秩序と階層

先に、コンピュータのソフト開発で巨万の富を稼ぎ出したビル・ゲイツのケースを挙げ、所得の不平等は大きければ大きいほど不満が高まるわけではないと述べた。富や権力者への賛美の感情は、歴史を振り返ってみても多くの時代に見いだせる。人々はいつの時代も、「スター」に憧れてきたのであり、その憧れが社会秩序の安定化要因として作用した面もあるとア

ダム・スミスは見ている。

『道徳情操論』で「野心の起源ならびに身分の区別について」スミスは論じている。「ここでスミスは「野心の起源」すなわち、人間社会における全ての異なる階層を通して見られる競争心（は安楽とか快楽を求める心からではなくて、「虚栄心」からだ）と断定する。そして人々は、「富者や権力者の抱くあらゆる情感と同じ情感に常にひたりたい」というこの人類の性情を基礎として、身分の差別や社会の秩序が確立されている」と考える。そして次のように言う。

「われわれが自分たちよりも優れた人に対して阿諛追従するのは、彼らの行為に訴えて何らかの恩恵に与ろうと期待するためではなくて、むしろ彼らの有利な地位に対してわれわれが心からの賛美を惜しまないからである」と。つまりわれわれが彼らに奉仕したがるのは、奉仕自体が目的であって、高貴の人に「恩義を感じさせた」という「虚栄」と「名譽」以外には、何ら報酬を期待しているわけではない。こうした「服従のための服従」をわれわれは楽しんでるのであって、社会秩序はこうした人間の性向によって、最も強く支えられているとスミスは見ている。

大多数の人間は、利害関係が薄いにもかかわらず、富と権力の賛美者であり崇拜者となる。富と権力を崇拜・賛美することによって、特に何の恩恵も得られないのに、人々はそれを崇拜・賛美することに満足するのである。社会階層には、こうした人間の格差から生ずる要素が生み出す「構造」がある。スミスは指摘するのである。

比較と差の過大評価

さらにスミスは、次のような逸話を紹介している。「社交好きの軽薄なローソム侯爵はパスチーユ牢獄に監禁され、孤独の生活をしていても、一定の時間が経過すると、彼は十分心の

落ち着きを取り戻して一匹の蜘蛛を飼うことに自ら打ち興
じることができるまでになった。一層好条件に恵まれた人の
心はおそらく一層速やかにその落ち着きを回復すると共に、
また一層速やかに自分自身の思想のうちに、はるかに優れた
娯楽を見いだすにちがいない」と。

そしてスミスは、人間の悲惨は、ひとつの状態と別の状態と
の間の差異を過大に評価することから生じると言う。貪欲は、
貧困と富貴との間の差異を過大に、野心は私生活と公的地
位との差異を過大に評価することから生まれる。「比較」す
ることによって、人間は自らに「不満足」と「不幸」を呼び寄せ
ていることになる。

格差の世襲化

近年の「格差論議」で持ち出される格差拡大のリトマス試
験紙は、ジニ係数などの数量的な指標であった。「所得」とい
う数量的な概念のチラハリの大小が問題の一面面であるから
には、この手法はまうとうなものではある。しかし、このリトマス
試験紙は、格差問題の他の重要な側面を覆い隠してしまいう可
能性がある。

例えば、個人や世帯を所得階層別にグループ分けしたとす
る。その場合、仮に全体の所得格差はジニ係数で見ても拡大して
いなくても、おのおのの階層に属する個人や世帯に「時間を
通した」入れ替わり(上昇と下降)がない社会と、絶えず階層
間の出入りがある社会とでは、その性格は異なる。いわゆる親
と子と比較して、社会的流動性(職業や所得の階層間の移動)
の低い社会は、それだけ格差が固定化(世襲化)し、階級社会
を生み出す可能性が高くなる。貧しい家庭に生まれた子女

は、自分の所得階層、社会階層から一生抜け出すことは難し
い。逆に、社会的流動性が高い社会では、たとえ格差拡大の傾
向が認められても、「機会の平等」という点では、所得格差が
少なく社会的流動性の低い社会より、「自由で平等な社会」
と呼ばれるかもしれない。

貧しい家庭の子女が、奨学金を得て高等教育を身につけ、
所得と社会的威信の高い職業に就き、別の新しい社会階層に
入るといふのは、日本でも、アメリカでも、かつて見られた社会
現象であった。そうした社会では、事実として存在する「格差」
が、文化的な差異を生み出すことはない。封建制のように、格
差が固定化、世襲化する社会では、文化的差異が生まれるが、
世代間の流動性の高い社会では、文化は同質化することはあ
っても、文化的差異が生まれることはない。「文化は世代を通
した伝承」といふ側面を持つからだ。

さらに、いかに自由な競争によって生じた格差であっても、
世代を通して格差が固定化してしまう社会は、本当に平等な
社会と呼びうるのだろうか。最近、R・ドーア氏(二〇〇六)は、
この点に関して興味深い論考を公にしている。一般に、メリト
クラシーの特徴は、労働市場参入時の学歴が地位獲得の鍵と
なること、良い学歴の獲得機会は一般国民に均等に与えられ
ている(と思われる)こと、学歴と実質的な仕事能力との
相関関係が高いことにある。ドーア氏はこのようにメリトクラ
シーを特徴づけ、このメリトクラシーも世襲化を生み出し、結
局、勝ち組エリートの新生産になりかねないという、イギリスの
社会学者マイケル・ヤングの考え(一九五八)を紹介している。
そしてこの種のメリトクラシーを徹底させてきたのが日本であ
るから、その日本に「世襲的階層形成」のメカニズムが生まれて
もおかしくはないというわけである。

その例として、東京大学の合格者に占める公立高校卒業生
の割合は、一世代前と比較すると大幅に低下し、私立高校卒
業生が増え、東京出身者の割合が大幅に増加した点を挙げ

る。学力優秀者が世代を経て、東京に移動した結果だとドーア氏は見るのである。

「平等への道で、最後の決定力を持つ」(トクビル)といわれる相統法の問題について拙稿では触れることはできなかったが、世代を超えて平等化に大きく作用するのは、相統制度であることは明らかである。家計資産のうちで相統資産の占める割合は、言うまでもなくこの相統制度に左右される。しかしこの議論を徹底していくと、問題は意外なところまで行き着かざるを得ない。それは人的資本のうち、先天的な能力の格差をどう捉えるのか、遺伝子DNAに課税するということが許されるのかといった、およそ人間の自由と平等に根本的に関わる問題に立ち入ることになるからである。

CEL

参考文献

- 『日本の不平等 格差社会の幻想と未来』大竹文雄 日本経済新聞社 二〇〇五年
- 『道徳情操論』アダム・スミス(米林富男訳) 未来社・上・下二巻 一九六九年)
- 『遺産』(貝塚啓明他監修、日本経済事典)大竹文雄 日本経済新聞社 一九九六年
- 『自由と秩序』猪木武徳 中央公論新社 二〇〇一年

- Rosen, Sherwin, "The Economics of Superstars", *American Economic Review*, Vol.71, No.5, December, 1981 pp.845-58
- 『人性論』トーマス・ヘンリー・ホーブ(大槻春彦訳) 岩波文庫 全四冊 一九四八年(五二年)
- 『学問のすゝめ』福澤諭吉 (岩波文庫 一九四二年)
- Tocqueville, Alexis, de, *Democracy in America*, translated by Henry Reeve, 2 vols. 1889 London
- 『政治学』アリストテレス(山本光雄訳) 岩波文庫 一九六一年)
- 『米国型の不平等社会になっていいのか』ロナルド・ドーア 『エコノミスト』二〇〇六・八・三二

猪木 武徳(いのき・たけのり)

国際日本文化研究センター教授、経済学者。一九四五年生まれ。専門は、労働経済学・経済思想。京都大学経済学部卒業。米国のサチューレット工科大学大学院修了。大阪大学教授を経て、二〇〇二年より現職。一九八七年に『経済思想』(岩波書店)でサントリー学芸賞・日経・経済図書文化賞、二〇〇二年に『自由と秩序 競争社会の二つの顔』(中央公論新社)で読売・吉野作造賞、二〇〇二年に紫綬褒章受賞。著書は他に、『新しい産業社会の条件 競争・協調・産業民主主義』(岩波書店)、『デモクラシーと市場の論理』(東洋経済新報社)、『文芸にあらわれた日本の近代 社会科学と文学のあいだ』(有斐閣)など。